

秋元氏による 谷村大堰開削

「堰」は普通「用水取り入れのため水をせき止めたり、水路の水位・流量を調節したりするために、水路中または流出口に築造した構造物」を表しますが、「谷村大堰」然り「五ヶ堰」然り、当地域ではそうした構造物を含む水路全体を表す言葉として用いられています。その役割は主に飲料水や灌漑用水の供給が中心で、水車の動力源としても使われることも多くありました。

谷村大堰（十日市場大堰）は、寛永十年（一六三三）に谷村城主に転封になった秋元泰朝が、寛永十三年から二年半の歳月をかけて完成したといわれている堰で、家臣の高山五兵衛を奉行として田原の滝の上から下谷村にいたる延長約14キロメートルの開削工事に成功しました。開削工事のために、十六歳以上の男子を使役しましたが、充分の日当を支給したので、農民たちは「ココノ五兵衛殿ウソツカヌ、名モ高山ノ御人哉、土ト銭トヲ御引カ工」と歌ったと「秋錦録」に残されています。

以後上谷村・下谷村・四日市場村・古川渡村の生活用水・農業用水、あるいは谷村城の堀水などとして用いられてきました。桂川の水を田原の滝の上から取り入れるこの堰は、途中分流したり合流したりして、やがて再び桂川と菅野川に落ちています。流域の村々に灌漑用水として供給され、新田の開墾と収量の飛躍的増大をもたらしました。文禄三年（一五九四）の浅野氏検地の石高と寛文九年（一六六九）の秋元検地による石高を比較すると、上・下谷村の場合二百三十三石余りが増加しています。また、水量が豊富で流れが急であったため、水車の動力源としても利用され、精米や製粉、明治以降には織機の動力に活躍しました。大堰はのちに延長されて禾生用水となり、さらに五ヶ堰として猿橋（大月市）まで潤して、郡内における最大の穀倉地帯を生み出しました。



●谷村大堰之碑
昭和60年（1985）、この谷村大堰（十日市場大堰）の功績を顕彰するために、市民有志によって取水口のほとりに建立されている。



●元坂の石橋
谷村大堰家中川の5ヵ所に架けられたので「五石橋」といわれている。この橋は上谷から元坂に通じるために架けられていたものを円通院の放生池に復元したもので、昭和50年に市の文化財に指定されている。